

団体名		岱明町ホタルを育てる会(熊本県玉名郡岱明町)	
団体の概要	活動開始年	西暦 1988年 5月 活動開始	
	メンバー	人数	<役員数> 8名 <事務局スタッフ数> 4名 <ボランティア数> 20名 <賛助会員数> 200名
		構成	学校区内の一般住民が多い 役員には小学校PTA会長・同後援会長、小学校教頭らを含む
	予算規模	平成13年度概算 ・収入 ¥244,290(会費1人1000円) ・支出 ¥202,691(施設器具材料費、修理費、謝金、会議費、印刷費等)	
団体の目的		ホタルで川を美しく、町を明るく～子どもと作るホタルの里～ 地域の子ども会や小学校の協力を得て、川の調査や清掃、幼虫やカワニナの飼育、ホタル鑑賞会等を行って、住民のホタル保護に対する関心を高め、明るいまちづくりに寄与する。	

#### ボランティア活動の概要

- ・ホタルの幼虫やカワニナを飼育して、地域の川(開田川)に放流する。
- ・子ども会や小学校児童と協力して、川の生物調査や水質検査を実施する。
- ・小中学校でホタルの授業をしたり、見学への説明をしたりして、学校における環境教育を支援する。
- ・ホタル鑑賞会を開いて、町民を案内する。
- ・年に3～4回会報「ほたる通信」を発行し、環境保護に対する関心を高める。
- ・年初会報で「ホタルの会入会者」を募る。入会希望者は、小学校PTA地区委員に会費を添えて申し込む。郵便払込制も設け、郵便局の窓口で払込用紙を預けておく。

#### ボランティア活動を立ち上げた経緯

昭和63年初夏、当時は絶滅したと思われていた開田川で「夕べホタルが飛んでいるのを見た」という子どもの知らせがきっかけで、開田川のホタルをもっと増やそうと会が発足した。

発足にあたっては、会を大人だけの活動に終わらせず、子どもを活動の全面に立てた。次代を担う者の環境保護への意識を高めることを目的として、子ども会やPTAとの連携を図ることに重点を置いている。

活動のきっかけを作ってくれたのは、子どもであった。そのため、保護者の共感を得て、スムーズに会を立ち上げることができた。また地域のリーダーである区長会も学校がやることであれば、協力を惜しまないということで会の理事を引き受けてくれた。

また、昭和 44 年にソニー理科教育振興資金最優秀賞を受賞したことを契機に設立された学校後援会という組織があり、当会からも物心両面にわたって強力な支援を得ることができた。

その後、ホタルを産卵・孵化から幼虫飼育・成虫観察まで一貫して育て、観察できる場が欲しいと町当局に依頼したところ、「ふるさと創生資金」の一部で「ホタルの里」を設置してくれた。小規模ながら、県内ではこうした施設は本町だけである。町では、施設の維持管理に関する予算も組んでもらっている。

#### 活動を継続するための工夫

##### 1. 学校の環境教育に対する支援

現在、学校では総合的な学習の一環として、地域の自然に対する学習を積極的に進めている。その意味で、ホタルは環境学習の典型的な教材である。会では、学校の環境学習に対する要請に応え、これを支援している。

##### 2. PTA・子ども会との連携

環境保護活動を単に老人の奉仕活動に終わらせず、子どもや子を持つ親が自らの課題と捉え、PTA や子ども会との連携を強めながら、親子が一緒になって活動する場に広げるよう努めている。

会の事務局は小学校に設置し、入会の窓口は小学校の PTA 地区委員会が努める。PTA の役員は交代していくので、新しい人材が活動に加わることになるのも強みである。

##### 3. ホタル鑑賞会の開催

過去 15 年間、会ではホタルの季節に「ホタル鑑賞会」または「ホタルの夕べ」を開いて、町民に憩いと交流の場を提供してきた。ホタルを見る人の感嘆する声を聞くと、ホタルを育てることの喜びと誇りを実感する。この事業を止める訳にはいかないとの思いを強くする。

##### 4. 他地域のホタルに関する組織との連携

県内のホタルを保護・育成する団体で作る「県ホタルを育てる会」のメンバーとなっている。同会は定期的に会合を開き、会報を発行し、研究発表などを行っている。同会に参加することで、ホタルに関する情報交換に役立っている。

#### ボランティア活動を行う上での困難点や課題、工夫

会員 200 名という大きな組織で、貴重な活動資金をもらっているが、実際の活動にあたって中核となって動くことができる人材が欲しい。会のスタッフも年々高齢化しており、早

く後継者を育てる必要に迫られている現状である。

ホタルが発生した開田川は、小規模で、しかも夏は流域の田んぼの重要な灌漑用水となっている。住民の中には、「開田川には昔からホタルが飛んでいた。今更ホタルを養わないでもいい」という意識を持っている人もいた。このような人の協力を得るために、地域の会合に出掛け、ホタルのことで田んぼには絶対迷惑はかけないという約束をして、納得してもらった。このため、幼虫の放流も稲刈りの後に実施している。

また、ホタル鑑賞会には毎年多くの人が見学に来るが、捕獲する人が後を断たない。このような一般見学者に対する啓発活動も積極的に行っていきたい。



< ホタルの幼虫を放流する子供達 >

(団体事務局長によるレポート、団体事務局長へのヒアリング調査、団体資料より作成)

<事例のポイント> 小学校を介して子供達と共に活動

活動のきっかけが子どもにあったこともあって、小学校の持つネットワークを活用した運営がなされている。

ボランティアや事務局のメンバーは高齢者が多いが、PTA や小学校を介することで、子供やその保護者の世代と共に活動することに成功している。多世代交流の機会を産んでいると評価することもできる。

<事例のポイント> 地域を巻き込んだ活動は、地域住民への配慮が大切

ホテルの住む水辺は、地域の生活空間である田畑と水系を介して直結している。そのため、ホテルの保護・育成は単なる環境保護活動にとどまるものではなく、地域住民の生活に影響を及ぼす活動である。そのため、地域住民に対してきちんと説明していくことが活動を行ううえで必要である。

<事例のポイント> 後継者探しが課題

団体創業以来の中心メンバーが継続して活動している団体では、後継者探しに苦労するケースが多い。「岱明町ホテルを育てる会」でもPTA を巻き込むことには成功しているが、事務局メンバーは高齢者が中心であり、後継者の育成が課題になっている。

企業なども含め、組織の創業者は偉大な存在であり、それを継ぐ次のリーダーの負担は心理的な面だけでも大きい。金銭面でのメリットなどが少ないボランティア団体ではその傾向は特に顕著である。ボランティア・コーディネーターは、後継者の負担が過大にならないように、後継者の手が上がりやすい環境づくりを、第三者として支援していくことが必要になる。

<事例のポイント> 他地域の団体と連絡会

県内で同様にホテルを保護・育成している団体と「県ホテルを育てる会」を結成しており、同会を通じて情報交換や交流を行っている。

活動にある程度の専門性が求められる場合、こうした地域外との交流も有効である。